

ムラブリ語の文法スケッチ *

伊藤 雄馬

京都大学大学院／日本学術振興会

キーワード：ムラブリ語、オーストロアジア語族、クム語派、文法スケッチ

はじめに

本稿はムラブリ語 (Mlabri) A 方言の文法の輪郭を示すことを目的とする。ムラブリ語にみられる特徴の概略を以下に列挙する。

<音声・音韻> 声門化有声閉鎖音、声門化わたり音、無声鼻音、無声流音が音素として認められる。音節末に位置する閉鎖を伴う子音 (閉鎖音、鼻音、側面接近音) は、全て無開放 (unreleased) である。無声鼻音、無声側面音、また震え音は特定の環境で成節的な子音となる。

<形態> 活用、曲用、格変化による語形変化のない、孤立的な言語である。接頭辞、接中辞が存在し、重複も見られるが、いずれも生産性が低い。

<統語> SV、AVO、NA である。所有表現は所有者-所有標識-被所有物の順序であり、地域的、類型論的に特異である。

<その他の文法範疇> 人称代名詞は、双数形から複数形を形成する点で類型論的に特異である。具格を表す形式がなく、「手段の目的語」 (object of instrument) でのみ具格を表しうる。

<語彙> 「食べる・飲む」を意味する語彙が複数存在し、食べる対象などによる使い分けが存在する。借用語にはタイ祖語の形式を残すとみられる語彙が存在する。

以下、本稿では断りのない限り筆者の独自の調査データに基づくものとする。また、日本語と対照して興味深い例を適宜取り上げる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず1章では、系統と社会言語学的情報について述べる。2章では、音韻論について概説する。3章では、標識 (marker)・接語 (clitic)・接辞 (affix) を定義し、また基本的な節・句構造について述べる。4章では、品詞論について述べる。5章では、形態論について概説する。6章では、その他の文法範疇について概説する。7章では、語彙の中でも特徴的な語彙、また借用語について述べる。

* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25・4309「北タイの危機言語ムラブリ語のドキュメンテーションとその分析」の助成を受けたものである。本稿の執筆にあたっては、吉田和彦氏、白田理人氏から多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表する。当然、本稿にありうべき誤りの責任は全て筆者にある。

1 系統・社会言語学的情報

1.1 系統

オーストロアジア語族 (Austroasiatic)、北方モン・クメール諸語 (Northern Mon-Khmer languages)、クム語派 (Khmuic) に分類されることが多い (cf. Sidwell 2009)。Rischel (2007) は、クム語派に属するとされるティン語 (T'in) とムラブリ語の間に音対応が認められることを明らかにし、ムラブリ語とティン語の間に系統関係の存在を示唆した。ただし、他のオーストロアジア語族内の別の語派、例えばパラウン語派 (Palaungic) やカトゥ語派 (Katuic) との関係も示唆されており、系統の位置づけについて研究者間の統一的な見解は未だ得られていない。

1.2 地域・人口・方言

ムラブリ語は、タイとラオス国境の山岳部で話される、話者数約 400 人の言語である (付録参照)。Rischel (2007: 30) によると、ムラブリ語には A、B、C 方言の 3 つの方言が存在する。

A 方言話者が最も数が多く、タイ北部のナーン県 (Nan) に 3 箇所、プレー県 (Phrae) に 2 箇所の村があり、そこに定住している。人口は 2013 年の段階で約 400 人である (cf. Nimonjiya 2014)。B 方言話者は、ナーン県のドーンプライワン村 (Ban Don Phrai Wan) に 3 名、別の村に 2 名、合計 5 名確認されている。両方言話者はお互いを同一民族と認めているが、交流はない。筆者の調査では、A 方言話者が B 方言話者を「凶暴・人食い」と恐れて忌避しており、この態度が交流のない原因のひとつと考えられる。C 方言話者はラオスのサイニャブリー県 (Sainyabuli Province) に住んでおり、人口は 2013 年の時点で 13 人との報告があるが、詳細は不明である。

本稿では、ナーン県のフアイユアク村 (Ban Huai Yuak) で話される A 方言を扱う。

1.3 方言間にみる「言語の難解化」

方言間で注目すべきは、語形の差である。ライプツィヒ・ジャカルタ基礎語彙表 (The Leipzig-Jakarta List of Basic Vocabulary) で挙げられている 100 語を両方言間で比較したところ、65 語はほぼ語形が一致するのに対して、35 語が A 方言と B 方言で音対応では説明できないほど語形が異なることが分かる (cf. Haspelmath & Tadmor 2009)。表 1 にその一部を挙げる。

表 1 A 方言と B 方言で語形の異なる例

	A 方言	B 方言
「犬」	brap	soʔ
「肉」	cin	tʰac
「話す」	tɔp	glaʔ
「来る」	leh	pruk

2 音韻論

2.1 音節構造

まず、便宜のために音節構造のテンプレートを図 1 に示す。

$$\overbrace{(C_{-2})C_{-1}}^{\text{(副音節)}} \overbrace{C_1(C_2)(C_3)V(C_4)}^{\text{主音節}}$$

図 1 音節構造テンプレート

音節は主音節と副音節の 2 つに大別できる。主音節は、単独で現れ、母音を音節核に持つ音節であり、副音節は主音節に先行する位置のみに現れ、子音を音節核に持つ音節である。

主音節の頭子音は 3 つのスロットに分けている。これは主音節の頭子音連続が最大 3 子音連続であること、また音素配列を説明するのに有効であるための便宜上のモデルである。主音節の頭子音 C_1 は義務的であるが、末子音 C_4 はそうではない。

副音節は C_{-1} の子音が音節核を担い、 C_{-1} 単独で形成される場合と、 C_{-2} と C_{-1} の両方で形成される場合がある。ただし、それぞれの場合で音節核 C_{-1} に現れうる子音が異なる。

また副音節の音節核と主音節の頭子音、つまり C_{-1} と C_1 の組み合わせには制約がある。よって、図 1 の音節構造テンプレートでは副音節と主音節を並べて記載してある。

2.2 超分節要素

ムラブリ語は超分節要素(声調、強勢、母音の長短など)によって語彙を弁別しない。ただし、強勢は音韻語の境界を示す境界表示機能を担う。母音の長短も、常にではないが、強勢を持つ音節にのみ現れうるため、境界表示機能を一部担う。

2.3 音韻語

音韻語 1 つにつき、1 つの強勢を持つ。強勢位置は音韻語の最終音節である。

また、1 音韻語は必ず 2 モーラ以上¹ であるとする、最小語制約が存在する。この制約の存在は、開音節の自由形式が長母音で発音されることから分かる。本稿では、最小語制約によって長母音で発音される形式を母音連続で表記する(例 1e)。例 1 に示す例は全て 1 音韻語をなす。

- (1) a. boʔ ['bo:ʔ~boʔ] 「乳」
 b. goh ['goh] 「折れる」
 c. tmʔoʔ [tm.ʔo:ʔ] 「蛇」
 d. pa-goh [pa.'goh] 「折る ([使]-折れる)」
 e. ʔbɣɣ [ʔbɣ:] 「葉」

¹ 本稿では母音と末子音をモーラに数える。例えば [CVC] と [CV:] は 2 モーラ、[CV] は 1 モーラと数える。

2.4 音素目録

2.4.1 母音

表 2 に母音の目録を示す。

表 2 母音の目録

	前舌	後舌/非円唇	後舌/円唇
狭	i	u	u
半狭	e	ɤ	o
半広	ɛ	ʌ	ɔ
広	a		

母音には 10 の音素を認める。前舌、後舌の母音があり、後舌のみ円唇性により対立する。広母音は前舌母音のみ存在する。

2.4.2 子音

頭子音と末子音の体系が異なるため、頭子音と末子音を別の体系として提示する。なお、副音節の C_{-2} 、 C_{-1} は頭子音と同じ体系として本稿では扱う。表 3 に頭子音の目録、表 4 に末子音の目録を示す。

表 3 頭子音の目録

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	有声	b	d	j	g	ʔ
	無声	p	t	c	k	
	帯気	p ^h	t ^h		k ^h	
	声門化	ʔb	ʔd			
摩擦音	無声		s			h
鼻音	有声	m	n	ɲ	ŋ	
	無声	^h m	^h n	^h ɲ	^h ŋ	
震え音	有声		r			
	無声		^h r			
側面音	有声		l			
	無声		^h l			
わたり音	有声	w		y		
	声門化	ʔw		ʔy		

頭子音には 32 の音素を認める。閉鎖音は、有声、無声、帯気、さらに両唇と歯茎には声門化の系列がある。鼻音、震え音、側面音には無声と有声の対立がある。わたり音は、有声と声門化の系列がある。なお、声門閉鎖音は有声に分類される (cf. 5.1.1)。硬口蓋閉鎖音は破擦音 (affricative) として発音される (jak ['dʒak] 「行く」、cʌŋ ['t͡ɕʌŋ] 「歯」)。声門化閉鎖音はしばしば入破音 (implosive) として発音される (^ʔbiʔ [^ʔbiʔ~βiʔ] 「芋虫」、^ʔdʌŋ [^ʔdʌŋ~^ʔdʌŋ] 「見る」)。無声鼻音、無声側面音は前半部分が無声である (^hlak [^hlak] 「ない」、^hmɛʔ [^hmɛʔ] 「新しい」)。

表 4 末子音の目録

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
側面音	有声 無声	l			
		l ^h			
震え音		r			
摩擦音			ɸ		h
わたり音	w		y		

末子音には 16 の音素を認める。調音点、調音法については頭子音と同じである。閉鎖音・鼻音・震え音に声や氣息などによる対立がなく、側面音のみに有声と無声の対立が存在する。閉鎖を伴う子音は全て無開放 (unreleased) である² (kup ['kup̚] 「雲」、kum ['kum̚] 「傷痕」、pol ['pol̚] 「毛布」)。無声側面音は、後半部分が無声である (pol^h ['pol̚^h] 「鹿の一種」)。

2.5 音素配列

2.5.1 母音連続

母音の音素配列を表 5 に示す。狭母音からはじまる母音連続のみ観察される。

表 5 母音連続

i-	io	jioŋ	「父」
	iʌ	wiʌŋ	「町」
	ia	ciak	「鹿」
u-	uɤ	kuɤy	「籠」
	uʌ	suʌk	「塩」
	ua	suak	「結ぶ」

² 慣例ではないが、鼻音・側面接近音についても無開放の記号 (̚) を本稿では用いる。

また、表 5 に挙げた母音連続と、わたり音と母音の連鎖は音韻的に区別される (例 2)。

- (2) a. wiɬŋ 「町」 vs. myʁʁ 「妻」
b. kuʁy 「籠」 vs. kwʁy 「バナナの種類」

2.5.2 主音節の頭子音連続

音素配列を説明するのに、まず図 1 で提示した音節構造テンプレートの子音 C_{-2} 、 C_{-1} 、 C_1 、 C_2 、 C_3 それぞれの位置に現れうるかによって、頭子音を 8 つの自然類に分類する。

表 6 頭子音の自然類

	自然類	音素例	子音
(I)	阻害音類	b, p, p ^h , s など	声門音以外の閉鎖音・摩擦音
(II)	鼻音類	m, n, ɲ, ŋ	有声鼻音
(III)	震え音類	r	有声震え音
(IV)	側面音類	l	有声側面音
(V)	わたり音類	w, y	わたり音
(VI)	声門音類	ʔ, h, ʔb, ʔd, ʔw, ʔy	声門音、声門化閉鎖音・声門化わたり音
(VII)	無声共鳴音類	^h m, ^h n, ^h l など	無声鼻音・無声側面音
(VIII)	無声震え音類	^h r	無声震え音

次に、8 つの自然類の分布を表 7 に示す。 C_{-1} の丸括弧は、 C_{-2} のスロットが埋められている場合のみ現れうることを表す。

表 7 自然類の分布

	C_{-2}	C_{-1}	C_1	C_2	C_3
(I)	+	-	+	-	-
(II)	-	(+)	+	-	-
(III)	+	+	+	+	-
(IV)	-	(+)	+	+	-
(V)	-	-	+	-	+
(VI)	-	-	+	-	-
(VII)	-	+	+	-	-
(VIII)	-	+	-	-	-

最も分布の広い自然類は震え音類 (III) であり、 C_3 以外の全ての位置に現れうる。最も分布の狭い自然類は、声門音類 (VI) と無声震え音類 (VIII) である。

主音節における、頭子音連続の可能な組み合わせ、及びその例を表 8 に示す。

表 8 主音節の頭子音連続

C ₁	C ₂	C ₃	例		
阻害音類	震え音類	-	preʔ	[ˈpreʔ]	「トウガラシ」
阻害音類	側面音類	-	pleʔ	[ˈpleʔ]	「果実」
阻害音類	-	わたり音	pyee	[ˈpye:]	「トカゲの一種」
鼻音類	震え音類	-	mrek	[ˈmrek]	「絞る」
鼻音類	側面音類	-	mleʔ	[ˈmleʔ]	「ムラブリ」
鼻音類	-	わたり音	myɣɣ	[ˈmyɣ:]	「妻」
阻害音類	震え音類	わたり音	grwɛc	[ˈgrwɛc]	「爪」
阻害音類	側面音類	わたり音	klwen	[ˈklwen]	「方向」

3 子音連続は、前半の 2 子音が副音節となる場合もある (例 3)。

- (3) a. grwɛc [ˈgrwɛc~gr̩.ˈwɛc] 「爪」
 b. klwen [ˈklwen~kl̩.ˈwen] 「方向」

2.5.3 副音節

副音節の可能な組み合わせを表 9 に示す。なお、以下からは、音節境界が子音と子音の間にある場合のみ、ピリオドによってその音節境界を示す。

表 9 副音節

C ₋₂	C ₋₁	例		
-	震え音類	r.map	[r̩.ˈmap]	「畑」
-	無声共鳴音	^h n.taʔ	[_{ŋ̥} .ˈtaʔ]	「尾」
-	無声震え音	^h r.leʔ	[_{ɾ̥} .ˈleʔ]	「笑う」
阻害音類	鼻音類	sm.bɛp	[sm̩.ˈbɛp]	「口」
震え音類	鼻音類	rm.bah	[rm̩.ˈbah]	「側面」
阻害音類	震え音類	kr.poʔ	[kr̩.ˈpoʔ]	「雷」
阻害音類	側面音類	kl.muy	[kl̩.ˈmuy]	「毛」
震え音類	側面音類	rl.rɛl	[rl̩.ˈrɛl]	「夕暮れ」

C₋₁ が鼻音類、C₁ が阻害音類のとき、2 つの音は同器官的である (例: 表 9 の「尾」、「口」、^hn̩.cak [̩̥.ˈt̩̥ak] 「ネズミの一種」、^hŋ̩.kok [̩̥.ˈkok] 「銃」)。

2.6 イントネーション

イントネーションのかかる単位は文である³。よって、イントネーションは文の境界を表示する機能を持つ。

いくつか種類が認められるが、とりわけ、文末の音節を裏声で長く発音するイントネーションが特徴的である(以下、これを裏声イントネーションと呼び、上向き矢印 ↗ で表す)。裏声イントネーションは、命令、非難、忠告などの発話や、間投詞の発話に観察される(例 4)。

- (4) a. maʔ ʔoh↗
 与える [1 単]
 「私にくれ。」
 b. hεε↗
 [間]
 「えー！(非難)」

3 標識・接語・接辞、節・句構造

本章では、標識・接語・接辞を定義し、その後、基本的な節・句構造をみる。

3.1 標識・接語・接辞

本稿では、音韻語の指標となった最小語制約と強勢付与可能性により、拘束形式を標識、接語、接辞に分ける(表 10)。

表 10 標識・接語・接辞

	最小語	強勢
標識	+	+
接語	-	+
接辞	-	-

標識は最小語制約にかない、かつ強勢を付与しうる(例 5a)。接語は最小語制約にはかなわないが、強勢を付与しうる(例 5b)。接辞は最小語制約にかなわず、かつ強勢を付与できない(例 5c)。

- (5) a. kɔbɔ jak [kɔ.bɔ.ˈdʒak~kɔ.ˈbɔ.ˈdʒak] 「行かない」
 b. ʔa=wɔl [ʔa.ˈwɔl~ʔa.ˈwɔl] 「行つた」
 c. pa-buɪ [pa.ˈbuɪ], *[ˈpa.ˈbuɪ] 「殺す([使]-死ぬ)」

³ この定義は循環論法的である。

3.2 基本的な節構造

基本的な構成素の並び他動詞主語-述語-目的語 (AVO)、自動詞主語-述語 (SV) である。なお、主語と目的語は文脈によって省略されうる (例 6 の話者 B の発話)。

- (6) 話者 A mɛh mak ʔoh leh
 [2 単] 好む [1 単] [諾否]
 「あなたは私が好きか？」
 話者 B mak
 好む
 「好きだ。」

3.2.1 動詞述語節

動詞が述語となる節は、自動詞では主語-述語 (SV、例 7a)、他動詞では主語-述語-目的語 (AVO、例 7b)、二重他動詞では主語-述語-関節目的語-直接目的語 (AV-IO-DO、例 7c) の順である。

- (7) a. ʔoh ^hr.leh
 [1 単] 笑う
 「私は笑う。」
 b. ʔoh mak mɛh
 [1 単] 好む [2 単]
 「私はあなたが好きだ。」
 c. ʔoh maʔ mɛh ^hŋ.keʔ
 [1 単] 与える [2 単] 薪
 「私はあなたに薪をあげる。」

叙述法は特別な標識を必要としない。疑問法は節末の疑問標識、もしくは疑問語 (interrogatives) で示す (例 8b、c)。疑問語疑問文には疑問標識は必要ない。命令法は、イントネーションなどで表す。

- (8) a. mɛh jak leh
 [2 単] 行く [諾否]
 「あなたは行くか？」
 b. mɛh jak kaleŋ
 [2 単] 行く どこ
 「あなたはどこへ行くか？」

3.2.2 名詞述語節

名詞句が標識を伴わずに述語となりうる。つまり、名詞句を述語として機能させるための標識(コピュラなど)は存在しない(例 9a)。名詞述語を否定する場合は、否定接語 *ki=* と *mɛn* 「正しい」を用いて表す(例 9b)。

- (9) a. *gʌh ^hŋ.keʔ*
 [近 2] 薪
 「これは薪だ。」
- b. *gʌh ki=mɛn ^hŋ.keʔ*
 [近 2] [否]=正しい 薪
 「これは薪でない。」

3.3 基本的な句構造

3.3.1 名詞句

名詞句は基本的に主要部主導型 (head-initial) の構造である(例 10)。

- (10) a. *brap tr.nap*
 犬 大きい
 「大きい犬」
- b. *brap nii ʔoh mak*
 犬 [関] [1 単] 好き
 「私の好きな犬」

3.3.2 動詞句

動詞句は主要部終端型 (head-final) の構造を示す。否定、テンス・アスペクト、モダリティなどを表す形式は動詞に先行する(例 11)。

- (11) a. *ʔoh kɔbɔ jak*
 [1 単] [否] 行く
 「私は行かない。」
- b. *ʔoh kalɔy jak*
 [1 単] [過未完] 行く
 「私は行かなかった。」
- c. *ʔoh dalɔy jak*
 [1 単] [義] 行く
 「私は行かなければならない。」

4 品詞論

4.1 品詞概略

ムラブリ語の品詞は名詞、動詞、その他に大別できる。なお、品詞は語の単位に適用される。指標は (A) 動詞の項になれるか、(B) 否定標識を取るかの 2 点である (表 11)。

表 11 品詞分類

	(A)	(B)
名詞	+	-
動詞	-	+
その他	-	-

4.2 名詞

名詞は、動詞の項となる唯一の品詞である。他に、名詞句の主要部となる (例 12a)、所有表現の所有者・被所有物となる (例 12b)、主語・述語となる (例 12c)、という機能を持つ。

- (12) a. tr.lɔh tr.nap
鍋 大きい
「大きい鍋」
- b. mɛh di=?ɛw
[2 単] [連]=子
「あなたの子」
- c. ?oh mla?
[1 単] ムラブリ
「私はムラブリだ。」

4.3 動詞

動詞は否定標識をとれる唯一の品詞である。動詞は状態動詞と動態動詞に大別できる。

状態動詞は並置 (juxtaposition) により名詞を修飾できるが、動態動詞はできない (例 13)。

- (13) a. brap tr.nap
犬 大きい
「大きい犬」
- b. *brap jak
犬 行く
「*行く犬」

状態動詞は程度を表す標識 hik 「とても」を取りうるが、動態動詞は取れない (例 14)。

- (14) a. hik tr.nap
 とても 大きい
 「とても大きい」
 b. *hik jak
 とても 行く

4.4 その他

その他に含まれる品詞は様々だが、本稿では副詞と間投詞についてのみ述べる。

4.4.1 副詞

本稿では場所副詞と時間副詞についてみる。

場所副詞には、川を陸標にした副詞が存在する (表 12)。

表 12 川を陸標にした場所副詞

川下	川上	向こう岸
tijuxy	taŋ.nɣɣ	tuɣɔh

時間副詞は相対的な日を表し、比較的豊富である (表 13)。

表 13 日を表す時間副詞

昨日	今日	明日	明後日	明々後日	4 日後
t ^h waa	tal+ɔh	muʔuun	muɬuui	matuɣ	manuɣ

副詞の統語位置は文頭か、動詞句の後である (例 15)。

- (15) a. tal+ɔh mɛh jak kalɛŋ
 今日 [2 単] 行く どこ
 「今日あなたはどこへ行くのか？」
 b. mɔy ʔɣh r.map taŋ.nɣɣ
 [3 単] する 畑 川上
 「彼は川上で畑仕事をしている。」
 c. ɔam jak tuɣɔh
 [禁] 行く 向こう岸
 「向こう岸へ行くな。」

4.4.2 間投詞

間投詞は、常にイントネーションを伴って現れ、単独で文を成す (表 14)。

表 14 間投詞

非難	落胆	驚き	失敗
hɛɛ	bijɽɽ	ʔihii	bat ^h oo

特定の親族に対する呼びかけにのみ用いることができる間投詞が存在する。本稿では、そのような間投詞を「呼称 (address term)」と呼ぶ (表 15)。

表 15 呼称

父	母	配偶者	子
mɽm	mɽʔ	sɔŋ.k ^h ɔt	ʔim.roɕ

- (16) a. hɛɛ↗ sɔŋ.k^hɔt↗ mɛh jak kalɛŋ
 [間] [呼. 配偶者] [2 単] 行く どこ
 「おい妻よ、お前はどこへ行くのか？」

4.5 機能語

品詞横断的な語類として、指示語 (demonstrative) と疑問語を認める。

4.5.1 指示語

指示語は指示 (reference) と照応 (anaphora) の機能を持つ。

指示の観点から、話し手と聞き手の両方に近いものを指す「近称 1」、話者の近くにあるものを指す「近称 2」、話者の遠くにあるものを指す「遠称」の 3 種類が認められる (表 16)。

表 16 指示語

	近称 1	近称 2	遠称
名詞	k ^h ihit	gɔh	ɲɔʔ
副詞	k ^h ihit	gɔʔ	ɲɔh

指示語は、名詞と副詞のいずれかとして機能する。名詞として機能する場合と、副詞として機能する場合とでは、「近称 2」と「遠称」は語末の声門音が入れ替わる (表 16)。

副詞として機能する場合は、場所を表す副詞として動詞句を修飾する (例 17)。

- (17) a. ʔoh mak gΛh
[1 単] 好む [近 2]
「私はこれを好む。」
- b. dɔk gΛʔ
置く [近 2]
「ここに置く。」

4.5.2 疑問語

ムラブリ語の疑問語は、疑問代名詞、疑問副詞に大別できる。疑問代名詞を表 17 に示す。

表 17 疑問代名詞

なに		だれ
近称	遠称	
cigΛʔ	ciɲΛh	tumlaʔ

「なに」には 2 種類あり、副詞用法の指示語の gΛʔ 「近称 2」、ɲΛh 「遠称」をそれぞれ含む。「近称 2」を含む疑問代名詞は、指示語 gΛh 「近称 2」とのみ共起可能であり、「遠称」を含む疑問代名詞には制限はない (例 18a, b)。「だれ」は、mlaʔ 「ムラブリ」を後部に含む。

- (18) a. gΛh {cigΛʔ/ciɲΛh}
[近 2] {なに [近]/なに [遠]}
「これは何？」
- b. ɲΛʔ {*cigΛʔ/ciɲΛh}
[遠] {*なに [近]/なに [遠]}
「あれは何？」

次に疑問副詞を表 18 に示す。

表 18 疑問副詞

いくつ	いつ	どう	どこ
pan+ʔdɻɻ	hwan+ʔdɻɻ	sin.ʔdee	kalɛŋ

「いくつ」、「いつ」には不定を表す標識 ʔdɻɻ が含まれる (cf. tal ʔdɻɻ 「いつか (日 [不定])」)。「いくつ」、「どう」の pan, sin は、不定標識の代わりに副詞用法の指示語をつけることが可能である (pan gΛʔ 「このくらいの量・大きさ」、sin ɲΛh 「あのよう」)。

疑問副詞の統語位置は、節末である (例 19)。

- (19) a. mɛh pɣʔ pan+ʔdɣɣ
 [2 単] 持つ いくつ
 「あなたはいくつ持っているか？」
 b. mɛh jak hwan+ʔdɣɣ
 [2 単] 行く いつ
 「あなたはいつ行くか？」
 c. bih lam sin.ʔdee
 切る 木 どう
 「木をどう切るか？」

日本語の「なぜ」に相当する、理由を尋ねるためだけの疑問語は存在しない。理由を尋ねる場合、疑問代名詞 cipɬh 「なに」か疑問副詞 sin.ʔdee 「どう」を用いて理由を尋ねる。

まず、cipɬh 「なに」を単独で用いた場合、理由を尋ねる表現となりうる (例 20)。

- (20) cipɬh
 なに [遠]
 「なぜ？」

また、cipɬh 「なに」を動詞述語文の文末に置くことでも理由を尋ねる表現となる (例 21)。その場合、「なぜ V するのか」という意味となる。

- (21) jak cipɬh
 行く なに [遠]
 「なぜ行くのか？」

他動詞の場合も「なに」を文末に置くことで疑問を表しうるが、他動詞の目的語を尋ねているのか、理由を訪ねているのか曖昧になる (例 22)。

- (22) ʔɣʔ cipɬh
 食べる [穀] なに [遠]
 「何を食べたか？/なぜ食べるのか？」

「どう」を用いて理由を尋ねる方法は、「どう」 sin.ʔdee のみを用いる方法、ʔɣh 「する」と sin.ʔdee 「どう」を共に用いる方法がある (例 23)。

- (23) mɔy bec {sin.ʔdee/ʔɣh sin.ʔdee}
 [3 単] 泣く {どう/する どう}
 「彼はどのように泣くのか？」

5 形態論

ムラブリ語は、屈折や曲用による形態法が存在せず、接辞法、重複法も生産的でないことから、形態論の乏しい言語であると言える。本節では、接辞法、複合法、重複法について述べる。

5.1 接辞法

ムラブリ語には、接頭辞、接中辞が認められる。まず、接頭辞について述べ、次いで接中辞について述べる。

5.1.1 接頭辞

接頭辞には名詞語根をホストとする集合接頭辞と、主に動詞語根をホストとする使役接頭辞、名詞化接頭辞が存在する。

集合接頭辞は名詞語根をホストとし、集合名詞 (collective noun) を形成する (例 24)。

- (24) a. ja-ʔuy 「女たち」 ([集]-女)
 b. ja-pol^h 「鹿たち」 ([集]-鹿)
 c. ja-kwɔɾ 「部外者たち」 ([集]-部外者)

使役接頭辞は主に動詞語根をホストとし、使役動詞を形成する。

この使役接頭辞には、異化 (dissimilation) が観察される。語根の頭子音が有聲の時は無声の接頭辞 pa-、語根の頭子音が無声の時は有聲の接頭辞 ba-が現れる (例 25a, b)。語根の頭子音が声門閉鎖音の場合は、無声の使役接頭辞が現れる (例 25c)。よって、声門閉鎖音は有声音と分析する (cf. 表 3)。また、使役接頭辞は親族名詞をホストとしうる (例 25d)。

- (25) a. pa-buɪ 「殺す」 ([使]-死ぬ)
 b. ba-hot 「落とす」 ([使]-落ちる)
 c. pa-ʔʏʔ 「食べさせる」 ([使]-食べる [穀])
 d. pa-diŋ 「兄/姉とする」 ([使]-兄姉)

名詞派生接頭辞は主に動詞語根をホストとし、それが表す動作に関連する名詞を形成する (例 26a, b)。また、単数の一人称と二人称の人称代名詞をホストとすることができ、その場合「私の所有物・あなたの所有物」という名詞を派生する (例 26c, d)。

- (26) a. pr-nɔn 「寝床」 ([名]-寝る)
 b. pr-ʔɯh 「やり方」 ([名]-する)
 c. pr-ʔoh 「私の所有物」 ([名]-[1 単])
 d. pr-mɛh 「あなたの所有物」 ([名]-[2 単])

ただし、これらの接辞は一部の語根に使用が限られており、生産性が低い。例えば、geŋ 「家」に付けて *ja-geŋ、jak 「行く」に付けて *pa-jak、*pr-jak としても意味は通じない。

5.1.2 接中辞

接中辞には名詞派生接中辞が存在する。動詞語根をホストとし、その動詞語根が表す動作と関連する名詞を形成する。この接中辞には複数の異形態が観察される。それぞれの異形態が現れる環境を表 19、例を例 27 に示す (C=子音、V=母音、N=鼻音)。

表 19 接中辞

-rn-	→	-mn-	/ C__VN
	→	-r-	/ C__w, yV
	→	-n-	/ C__rV
	→	-rn-	/ elsewhere

- (27) a. t-mn- Δ p 「言葉」(話す-[名])
 b. k-r-wac 「箒」(掃く-[名])
 c. j-n-rak 「櫛」(梳く-[名])
 d. t-rn-uy 「杵」(搗く-[名])

この接中辞も生産性が低く、例えば jak 「行く」を*j-rn-ak としても意味は通じない。

5.2 複合語

名詞を主要部とした複合語を中心に観察される。複合語は、前半部分の母音が弱化したり、子音が消失したり、音節構造が変化する場合がある。ただし、複合語の全てに音声的な変化が見られるわけではなく、また句にも弱化現象は観察されるため、実際には複合語と句を音声的に区別することは難しい。よって、意味的な不透明性を持つものを複合語とし、句と区別する。

表 20 複合語

「火打ち石」	kol+ ^h lek	[k ^ə l. ^ˈ lek]	「棒」+「鉄」
「ムラブリ」	m ^l a? [?] +bri?	[m ^l a. ^ˈ bri?	「人」+「森」
「夫婦」	my ^ɣ +g ^l aŋ	[my ^ɣ . ^ˈ laŋ]	「妻」+「夫」
「年寄り」	sak+ [?] im.roç	[sa.k ^ə m. ^ˈ roç]	「体」+「子」
「虎」	brap+ [?] diŋ	[brap. ^ˈ diŋ]	「犬」+「大きい」
「コップ」	kək+w ^ɣ k	[kək. ^ˈ w ^ɣ k]	「パイプ」+「飲む」

なお、複合語と句の区別は、他の要素の介在可能性によっても判断しうる。つまり、複合語は他の要素の介在を許さないが、句は介在を許す (例 28)。

- (28) a. bɾaŋ+[?]diŋ
 犬 + 大きい
 「トラ」
- b. *bɾaŋ hik [?]diŋ
 犬 とても 大きい
- c. bɾaŋ tr.nap
 犬 大きい
 「大きい犬」
- d. bɾaŋ hik tr.nap
 犬 とても 大きい
 「とても大きい犬」

5.3 重複法・感情語

重複法は非常に生産性が低く、明確な例は 2 例しか観察できていない (表 21)。

表 21 重複法

「枯れている」	bl~buɪl	buɪl 「死ぬ」
「なくなっている」	^h la~ ^h lak	^h lak 「ない」

一方で、繰り返しのみられる語根は多く観察される (表 22)。これは、入力に相当する形式がない点で表 21 の例とは異なる。オーストロアジア語族の研究では、繰り返しなどの音象徴を利用する語形成・形態法を広く感情語 (expressive) と呼ぶが、これらの語根も感情語に該当するものとする (cf. 長田 2009)。

表 22 感情語

「腫れる」	bŋ.bəŋ	*bəŋ
「蟬」	dl.dəl	*dəl
「微笑む」	yik.yək	*yik, *yək
「カワセミ」	jrik.jrek	*jrik, *jrek

重複法とこの種の感情語は、要素が繰り返されている点で共通するが、観察できる数に大きな違いがあり、また入力観察されるかどうかという点でも異なるため、別の機構と考える⁴。

⁴ Avram (2011) では、繰り返しのみられる感情語と類似した例を疑似重複 (pseudo-reduplication) と呼び、形態法の重複 (reduplication) と区別している。

6 その他の文法範疇

6.1 連結接語

多くの機能を持つ連結接語 (linker) *di=*が存在する。連結接語は名詞、動詞の両方をホストとしうる接語で、所有、再帰、動詞の副詞化など、様々な機能を持つ (例 29)。

- (29) a. *ʔoh di=ʔɛw ʔa=jak hon.hian*

[1 単] [連]=子 [完]=行く 学校

「私の子供は学校へ行った。」

- b. *ʔoh ʔa=wɔl di=gɛŋ*

[1 単] [完]=帰る [連]=家

「私は自分の家に帰った。」

- c. *guut di=pyaʔ.kleh*

考える [連]=良い

「よく考える」

本稿では所有についてのみ詳しくみる。所有を表す表現は、所有者-標識-被所有物の順序となり、主要部終端型 (head-final) の構造を示す。主要部終端型の構造は、AVO 型の言語の類型に反している点、また同地域の言語には見られない特徴である点で注目に値する。また、Dixon (2010: 262, 263) によるところの、所有、全体-部分関係、親族関係を表しうる (例 30)。

- (30) a. *ʔoh di=gɛŋ*

[1 単] [連]=家

「私の家」

- b. *ʔoh di=ket*

[1 単] [連]=耳

「私の耳」

- c. *ʔoh di=ʔɛw*

[1 単] [連]=子

「私の子」

一方で、属性、位置、関連を表せない。関連を表す場合は、並置によって表す (例 31)。

- (31) a. *ʔoh di=rup*

[1 単] [連]=写真

「私の所有する写真/*私の映っている写真」

- b. *rup ʔoh*

写真 [1 単]

「*私の所有する写真/私の映っている写真」

6.2 数詞

数詞は「一」から「十」まで存在する (表 23)。

表 23 数詞

「一」	məy	「六」	tal
「二」	bər	「七」	gul
「三」	pɛʔ	「八」	tiʔ
「四」	pon	「九」	gaɕ
「五」	tʰɯŋ	「十」	gal

数詞を用いて数量を表す場合、数詞と類別詞からなる数量句にして表す。数量句は、述語として機能する場合、名詞を修飾する場合、動詞を修飾する場合がある (例 32)。

- (32) a. ʔoh di=luk.ʔəm bər klɔʔ
 [1 単] [連]=飴 二 [類]
 「私の飴が 2 つある。」
- b. mlaʔ bər mlaʔ
 ムラブリ 二 [類]
 「ムラブリ 2 人」
- c. jak nən bər lək
 行く 寝る 二 [類]
 「2 日間寝に行く」

特殊な用法として、数詞「四」を数量句に用いると「たくさんの/全ての」という意味を普通意味し、「4 つの」という意味で解釈されることは稀である (例 33)。

- (33) pleʔ pon klɔʔ
 実 四 [類]
 「たくさんの実/全ての実/4 つの実」

数量句に後置して「プラス 1」を表す標識が存在する (例 34)。

- (34) pleʔ səŋ klɔʔ hloy
 実 二 [類] プラス 1
 「3 つの実」

数詞「二」の時に「プラス 1」の標識が表れやすいという傾向がある (cf. Rischel 1995: 147)。ただしこの標識が用いられる動機や pɛʔ「三」を用いた場合との差異は不明である。

6.3 人称

6.3.1 人称代名詞

人称代名詞に、一人称・二人称・三人称、単数・双数・複数の系列がある。ただし、指示と照応で、使用される形式が違う。まず、指示用法における人称代名詞を表 24 に示す。

表 24 指示用法における人称代名詞

	単	双	複
1	ʔoh	ʔah	ʔah+t ^h ʔŋ
2	mɛh	bah	bah+t ^h ʔŋ
3	mɔy	ʔak+bɛr	jum+ɲʌʔ

一人称・二人称、単数・双数が最も基本的な体系をなし、三人称と複数の系列は全て 2 次的な表現である。一人称・二人称の複数形は、それぞれの双数形と数詞「五」からなる。三人称、単数は数詞「一」と同形である。三人称・双数は定冠詞 ʔak と数詞「二」からなる。三人称・複数 は jum 「集団」と遠称で名詞用法の指示語 ɲʌʔ からなる。

複数形が双数形から派生されている点で類型論的に特異である。なお、双数、複数に包括・除外の区別、また人・動物・無生物などによる違いは確認されていない。

照応用法では、二人称・双数形が三人称の双数・複数に対しても用いられる (表 25 下線部)。

表 25 照応用法における人称代名詞

	単	双	複
1	ʔoh	ʔah	ʔah+t ^h ʔŋ
2	mɛh	bah	bah+t ^h ʔŋ
3	mɔy	ʔak+bɛr, <u>bah</u>	jum+ɲʌʔ, <u>bah</u>

二人称・双数形が三人称・複数形で用いられている例を挙げる (例 35)。

- (35) A : bah+t^hʔŋ jak kalɛŋ
 [3 複] 行く どこ
 「彼らはどこへ行くのか？」
 B : bah ʔa=wʌl
 [2 双] [完]=帰る
 「彼らは帰った。」

二人称・双数形の照応用法における意味範囲は、次節で説明する人称所有標識と対応している (例 37b)。

6.3.2 人称所有標識

人称代名詞から派生した、人称所有標識が存在する。人称所有標識は、一人称・二人称、単数・双数のみ存在する (表 26)。

表 26 人称所有標識

	単	双
1	ʔok	ʔak
2	mɛk	bak

単数の所有標識は、それぞれ「私の」、「あなたの」を表す。通常の名詞句と異なり、主要部終端型 (head-final) の構造を示す点で、連結接語による所有表現と同じである。意味する範囲も、所有、全体-部分関係、親族関係と、連結接語を用いる場合と同じである (例 36)。

- (36) a. ʔok gɛŋ
 [1 単有] 家
 「私の家」
 b. ʔok ket
 [1 単有] 耳
 「私の耳」
 c. mɛk ʔɛw
 [2 単有] 子
 「あなたの子」

双数形から派生した所有標識には、特殊な用法が存在する。一人称・双数から派生した ʔak は、二人称・双数の所有「私達ふたりの (所有する)～」を表しうるが、「定冠詞」として用いられることが多い (例 37a)。二人称・双数から派生した bak は、二人称・双数の所有だけでなく、三人称の双数・複数、すなわち非単数の所有「彼らの/彼女らの」を表す (例 37b)。この二人称・双数の所有標識の意味範囲は、照応における人称代名詞の意味範囲と対応している (cf. 表 25)。

- (37) a. ʔak ʔbɽɽ kɔbɔ jɿɕ
 [定] 葉 [否] 美味しい
 「その葉は美味しくない。」
 b. bak gɛŋ hik ʔyɛʔ
 [2 非単有] 家 とても 遠い
 「彼らの家はとても遠い。」

6.4 所格・向格

所格接語 (locative) と向格標識 (allative) は名詞句をホストとし、副詞句、名詞修飾句を形成する (例 38)。

- (38) a. ʔoh bih lam ni=briʔ
 [1 単] 切る 木 [所]=森
 「私は森で木を切る。」
 b. ʔah+t^hʔŋ h^hŋuh luŋ briʔ
 [1 複] 居る [向] 森
 「私たちは森の方にいる。」

向格標識のみ、指示語と人称代名詞をホストとしうる (例 39)。

- (39) a. ʔoh h^hŋuh luŋ gɬh
 [1 単] 居る [向] [近 2]
 「わたしはこっちの方に座る。」
 b. maʔ luŋ ʔoh ↗
 与える [向] [1 単]
 「私の方に渡せ。」

6.5 否定

否定標識 kɔbɔ と否定接語 ki=の 2 種類が存在する。否定標識は動態動詞と共起しやすく、否定接語は状態動詞と共起しやすい (例 40)。ただし、これは飽くまで傾向であり、義務的な使い分けではない。

- (40) a. kɔbɔ jak
 [否] 行く
 「行かない」
 b. ki=tr.nap
 [否]=大きい
 「大きくない」

また、二重否定は標識-接語の順序のみ観察されている (例 41)。

- (41) ʔoh kɔbɔ ki=jaŋ ʔɤh
 [1 単] [否] [否]=できる する
 「私はできなくはない。」

6.6 テンス・アスペクト・モダリティ

テンス・アスペクト的な意味を表す形式は、接語と標識に分けられる。接語には、完了 (perfect) ?a=がある。標識には、現在未完了 (present imperfect) kalΛy.kur、過去未完了 (past imperfect) kalΛy、継続 kuu、先行 ?ar が認められる。表 27 にそれぞれ示す。

表 27 テンス・アスペクト

完了	現在未完了	過去未完了	継続	先行
?a=	kalΛy.kur	kalΛy	kuu	?ar

未完了にのみ、現在と過去の区別がある。例 42 にそれぞれの例文をあげる。

- (42) a. ?oh ?a=?ʔ yuk
[1 単] [完]=食べる [穀] ご飯
「私はご飯を食べた。」
- b. ?oh kalΛy.kur ?ʔ yuk
[1 単] [現未完] 食べる [穀] ご飯
「私はまだご飯を食べ終わっていない。」
- c. ?oh kalΛy ?ʔ yuk
[1 単] [過未完] 食べる [穀] ご飯
「私はご飯を食べなかった。」
- d. mɔy kuu nɔn
[3 単] [継] 寝る
「彼は寝ている。」
- e. ?oh ?ar wɔl
[1 単] [先] 帰る
「私は先に帰る。」

モダリティを表す形式は、接語と標識に分けられる。接語には、切迫 (imminent) ?a=、願望 si=を認める。標識には、義務 dalΛy、非義務 kalΛy、蓋然 ?ado の 3 種類が存在する。表 28 に形式、例 43 に例文を示す。

表 28 モダリティ

切迫	願望	義務	非義務	蓋然
?a=	si=	dalΛy	kalΛy	?ado

- (43) a. ʔoh ʔa=jak
[1 単] [迫]=行く
「私はもう行く。」
- b. ʔoh si=nɔn
[1 単] [願]=寝る
「私は寝たい。」
- c. ʔoh dalɔy jak
[1 単] [義] 行く
「私は行かなければならない。」
- d. ʔoh kalɔy ʔɤh
[1 単] [非義] する
「私はしなくてもよい。」
- e. mɛh ʔado nɔn
[2 単] [蓋] 寝る
「あなたは寝てもいいだろう。」

テンス・アスペクト・モダリティを表す形式で注目すべきは、形式の類似である。例えば、「完了」と「切迫」は、共に ʔa=であり、「過去未完了」と「非義務」の形式は共に kalɔy である。また、「義務」と「非義務」は後半部分-lɔy が共通しており、分析できる可能性を残す。

6.7 ムード

6.7.1 諾否疑問

諾否疑問には、諾否疑問標識を用いるものと、選択疑問文がある (例 44)。

- (44) a. ʔa=ʔɤʔ yuk leh
[完]=食べる ご飯 [穀] [諾否]
「ご飯を食べたか？」
- b. ʔa=ʔɤʔ yuk la ^hlak
[完]=食べる [穀] ご飯 か ない
「ご飯を食べたか否か？」

疑問語を含む疑問文については、3.2.1 節、4.5.2 節を参照されたい。

6.7.2 命令・禁止

動態動詞を裏声イントネーションを伴いながら発話した場合、命令の意味を表す (例 45)。

- (45) jak ↗
行く
「行け！」

禁止の表現には、禁止標識 $g\Delta m$ を動詞の前に置く (例 46)。

- (46) $g\Delta m$ jak ↗
 [禁] 行く
 「行くな！」

命令、禁止する相手は文頭に置く (例 47)。親族には呼称を用いる (cf. 4.4.2 節)。

- (47) $m\gamma m$ $g\Delta m$ jak ↗
 [呼. 父] [禁] 行く
 「父よ、行くな！」

過去未完了/非義務の標識 $ka\Delta y$ は、二人称を主語にした場合、相手がまだその行動をしていないことを非難して、行動を促す意味合いが出る (例 48)。

- (48) $m\epsilon h$ $ka\Delta y$ jak ↗
 [2 単] [過未完]/[非義] 行く
 「あなたは早く行け！ (lit. あなたは行かなかった。/あなたは行かなくてもよい。)」

6.8 ヴォイス

6.8.1 使役

使役を表すには使役接頭辞を用いる方法と、 $ma?$ 「与える」を用いる構文の 2 種類が存在し、意味的な差異が存在する。前者は使役接辞を用いた動詞の主語が動作を行い、後者は $ma?$ 「与える」の後にくる名詞句の指す人物が動作を行う (例 49)。

- (49) a. $m\omega$ $ba-t^halew$ $w\gamma k$ $?ok$ $?ew$
 医者 [使]-浴びる 水 [1 単有] 子
 「医者が私の子を水を浴びさせた。(医者が子に水をかけている)」
 b. $?oh$ $si=^?day$ $ma?$ $?ok$ $?ew$ t^halew $w\gamma k$
 [1 単] [願]=得る 与える [1 単有] 子 浴びる 水
 「私は私の子に水を浴びをさせたい (子が自分で水浴びをする)」

6.8.2 受身

現段階では、ムラブリ語に受身を表す形式・構文は観察されていない。ただし、使役接辞を用いた慣用表現に、日本語の受身で訳せられる表現が存在する (例 50)。

- (50) $m\epsilon h$ $ba-t\Delta n$ $?oh$
 [2 単] [使]-言う [1 単]
 「(相手を非難して) お前は俺に言われたじゃないか。 (lit. お前が俺に言わせた)」

6.9 手段の目的語

ムラブリ語には具格を表す形式が存在しない。具格に相当する表現は、具格を付与したい名詞句を直接目的語の位置に置くことで表す (例 51b)。目的語の位置にあり、具格の付与される名詞句を、本稿では「手段の目的語」(object of instrument) と呼ぶ (cf. イェスペルセン 2006: 85)。「目的語」と呼ぶのは、他動詞の後ろにこの両方が同時に現れえないことため、具格の付与される名詞句は目的語の位置を占めていると判断できるからである (例 51c、d)。

- (51) a. cuak bεʔ
掘る 土
「土を掘る」
b. cuak soʔ
掘る 鋤
「鋤で掘る」
c. *cuak bεʔ soʔ
掘る 土 鋤
d. *cuak soʔ bεʔ
掘る 鋤 土

具格と目的格の両方を持つ表現 (「鋤で土を掘る」など) を 1 つの動詞で表すことがムラブリ語はできない。そのような表現は、ʔek 「取る」を用いた動詞連続によって表す (例 52)。

- (52) ʔek soʔ cuak bεʔ
取る 鋤 掘る 土
「鋤で土を掘る」

6.10 談話標識

対比談話標識 (contrastive discourse marker) の katʌŋ と hak を認める。katʌŋ は対比する相手、または相手の行動に限定はないが、hak の場合は「対比する相手とは異なる」ことが含意される。この標識の付く名詞句は、必ず節の最初に置かれる (例 53)。

- (53) a. ʔoh katʌŋ jak
[1 単] [談] 行く
「(他の人はともかく) 私は行く。」
b. ʔoh hak jak
[1 単] [談] 行く
「(他の人は行かないが) 私は行く。/(他の人とは別方向だが) 私は行く。」

6.11 節連結

6.11.1 関係節

関係節は、標識 *nii* を用いる。主語、目的語の関係節化は可能であるが、手段の目的語は関係節化できない (例 54)。

- (54) a. *brap nii kɾʌp mɛh*
 犬 [関] 噛む [2 単]
 「あなたを噛んだ犬」
- b. *brap nii ʔoh mak*
 犬 [関] [1 単] 好む
 「私の好きな犬」
- c. **tiʔ nii ʔoh tɛk*
 手 [関] [1 単] 叩く
 「*叩くのに使った手」

6.11.2 従属節

従属節は、標識 *kana* を用いる (例 55)。従属節は主節に先行する位置が普通である。

- (55) *kana mɛʔ hot ʔoh ^hŋuh ni=gɛŋ*
 [従] 雨 落ちる [1 単] 居る [所]=家
 「雨が降ったら、私は家に居る。」

6.11.3 補文節

動詞により補文節の導入方法が異なる。*mɛc* 「見える・分かる」は標識を用いない (例 56)。

- (56) *mɛh ʔa=mɛc ʔoh wʌl hwan ^ʔdɻɻ lɛh*
 [2 単] [完]=見える [1 単] 帰る いつ [諾否]
 「あなたは私がいつ帰るか分かったか？」

tʌŋ 「言う」は標識 *ʔaa* を、*gʉt* 「考える」は標識 *tʌŋa* を用いる (例 57、58)。

- (57) *ʔoh tʌŋ ʔaa gʌm jak*
 [1 単] 言う [補] [禁] 行く
 「私は行くなと言った。」
- (58) *ʔoh gʉt tʌŋa mɛh ʔa=wʌl*
 [1 単] 考える [補] [2 単] [完]=帰る
 「私はあなたが帰ったと考えていた。」

7 語彙

7.1 食べる・飲む

「食べる」に相当する語彙が3種類存在する。それらは、食べる対象によって使い分けられる。 ?x? は米、パンなどの穀物や穀物由来のもの、 boŋ は肉類を、そして pɣy は果実やゼリーなど水分を多く含むものを食べる時にそれぞれ用いられる (例 59)。

- (59) a. $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pɣy}\}$ yuk
 {食べる [穀]/*食べる [肉]/*食べる [果]} ご飯
 「ご飯を食べる。」
- b. $\{\text{*?x?}/\text{boŋ}/\text{*pɣy}\}$ cin
 {*食べる [穀]/食べる [肉]/*食べる [果]} 肉
 「肉を食べる。」
- c. $\{\text{*?x?}/\text{*boŋ}/\text{pɣy}\}$ ple?
 {*食べる [穀]/*食べる [肉]/食べる [果]} 実
 「実を食べる。」

「飲む」に相当する語は2種類存在し、これも飲む対象によって使い分けがある。水分のみからなる液体は wɣk 、固形物が含まれている液体は sot を用いる (例 60)。

- (60) a. $\{\text{wɣk}/\text{*sot}\}$ jn.ra?
 {飲む [液]/*飲む [固]} 酒
 「酒を飲む。」
- b. $\{\text{*wɣk}/\text{sot}\}$ gn.roŋ
 {*飲む [液]/飲む [固]} 汁物
 「汁物を飲む。」

ただし、本来食べ物でないものを口にする場合は、それが何由来か、または液体か固形かに関係なく、穀物を食べる場合に用いる ?x? を用いる (例 61a)。さらに、人間以外の動物、例えば犬の食べる動作を表す場合も、食べる対象に関わらず ?x? が用いられる (例 61b)。

- (61) a. $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pɣy}/\text{*wɣk}/\text{*sot}\}$?yak
 {食べる [穀]/*食べる [肉]/*食べる [果]/*飲む [液]/*飲む [固]} 糞
 「糞を食べる。」
- b. brɔŋ $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pɣy}/\text{*wɣk}/\text{*sot}\}$ cin cabut
 犬 {食べる [穀]/*食べる [肉]/*食べる [果]/*飲む [液]/*飲む [固]} 肉 豚
 「犬が豚肉を食べる。」

よって、穀物を食べる ?x? が「食べる・飲む」行為を表す最も基本的な動詞であると考えられる。

以上でみた「食べる・飲む」を意味する語彙の関係を図2に示す。

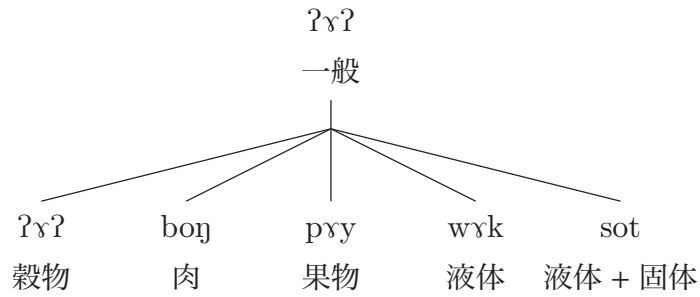


図2 「食べる・飲む」

7.2 借用語

タイ系言語からの借用語が多く観察される。その中で、タイ祖語 (Proto-Tai) の再建形には見られるが、現在のタイ系言語では声調対立に解消されてしまった頭子音の有声子音、無声側面音、声門化音・入破音 (implosive) を保持していると思われる語がいくつか存在する⁵。

表29 借用語

ムラブリ語	タイ祖語	タイ語	意味
bɛŋ	*beɛŋ ^A	p ^h ɛɛŋ ¹	「(値段が) 高い」
^h lek	* ^h lek ^D	lek ²	「鉄」
^ʔ yaa	* ^ʔ yua ^A	yaa ¹	「薬」
^ʔ bʔy	* ^ʔ baʔy ^A	bay ¹	「葉」
^ʔ dʔy	* ^ʔ daʔy ^A	day ¹	不定標識

また、タイ系言語からの借用語が豊富である反面、社会的に最も近いフモン語 (Hmong) やミエン語 (Mien) からの借用語がほとんどみられない点は興味深い。

⁵ タイ祖語、タイ語 (Siamese) の形式は Pittayaporn (2009) を参照したが、本稿に合わせて表記を一部変更してある。Pittayaporn (2009) は長母音を長母音記号を用いて表しているが、本稿では母音を連続して表記する方法に変更してある (「(値段が) 高い」の例など)。また、わたり音は j から y に変更した (「薬」の例など)。タイ語の声調表記も、一部簡略化してある。

記号・略号

.(ピリオド)... 音節境界；-... 接辞境界；=... 接語境界；+... 複合語境界；~... 重複；/... 裏声イントネーション；1... 一人称；2... 二人称；3... 三人称；C... 子音；N... 鼻音；V... 母音；単... 単数；双... 双数；複... 複数；非単... 非単数；有... 所有標識；間... 間投詞；呼... 呼称；近 1... 話し手と聞き手の両方に近い指示語；近 2... 話し手に近い指示語；遠... 遠称；定... 定冠詞；所... 所格；向... 向格；集... 集合名詞派生；名... 名詞派生；類... 類別詞；使... 使役；完... 完了；現未完... 現在未完了；過未完... 過去未完了；継... 継続；先... 先行；迫... 切迫；願... 願望；義... 義務；非義... 非義務；蓋... 蓋然；否... 否定；禁... 禁止；諾否... 諾否疑問標識；談... 談話標識；連... 連結標識；穀... 穀類を食べる；肉... 肉類を食べる；果... 果実類を食べる；液... 液体を飲む；固... 固体を含んだ液体を口にする；関... 関係節標識；従... 従属節標識；補... 補文標識

参考文献

- Avram, Andrei A. (2011) “Pseudo-reduplication, Reduplication and Repetition: The Case of Arabic-Lexified Pidgins and Creoles”, *Revue Roumaine De Linguistique-Romanian Review of Linguistics* 56(3): 225–256.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory*. Volume 2 Grammatical Topics. New York: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin & Uri Tadmor eds. (2009) *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook*. Berlin: Walter de Gruyter.
- イエス・ペルセン・オット著、安藤貞雄訳 (2006) 『文法の原理 (中)』岩波文庫 青 657-4. 東京: 岩波書店.
- Nimonjiya, Shu (2014) “Another History of Chao Khao: The Mlabri in Northern Thailand.” *Aséanie*. (in press)
- 長田俊樹 (2009) 「ムンダ語の感情語」大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集』1: 35–66. 京都: 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト.
- Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The Phonology of Proto-Tai*. Doctoral Dissertation, Cornell University.
- Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-Gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press.
- (2007) *Mlabri and Mon-Khmer—Tracing the History of a Hunter-gatherer Language*. Copenhagen: The Royal Danish Academy of Science and Letters.
- Sidwell, Paul (2009) *Classifying the Austroasiatic Languages: History and State of the Art*. Muenchen: Lincom Europa.

付録

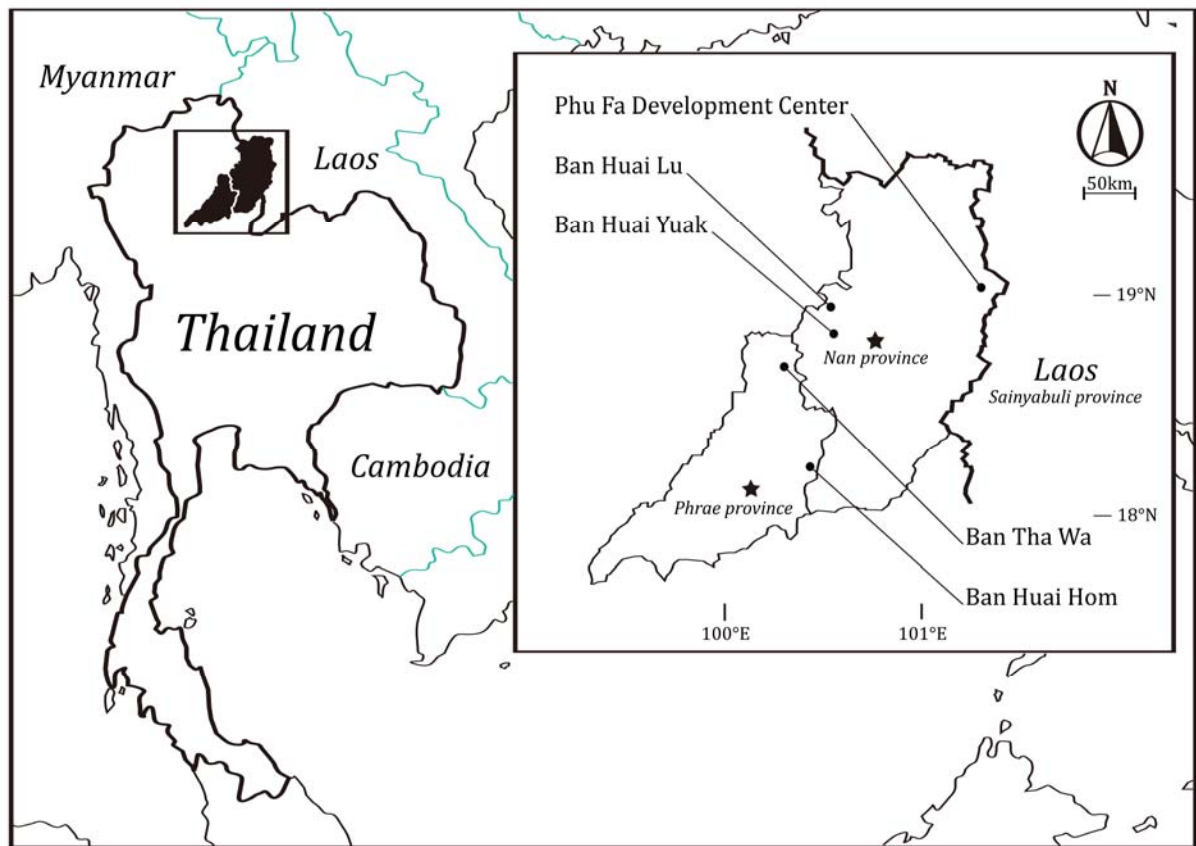


図3 タイ国におけるムラブリA方言話者の居住地 (Nimonjiya 2014)